

近代詩の先駆者としての G. M. ホプキンズ

緒 方 登 摩

ホプキンズの没後すでに100有余年が経過した。19世紀に生をうけ、しかもイエズス会に属する宗教詩人でありながら、この詩人にはどうしてか近代詩の先駆者としてのイメージが付きまとっている。その原因の一つとして彼の詩が友人ロバート・ブリッジズによってはじめて公にされたのが、彼の死後約30年を経た1918年であったことがあげられるだろう。つまり彼の詩はヴィクトリア時代においてはほとんど理解されず、20世紀になってはじめて正当に評価されるようになったと言えるのである。

かつて彼は「無意識的革命詩人」、「一種の単性生殖によってこの世に生まれ落ちて来たかのような詩人」と評されたことがある。それほどに彼の詩は英文学のそれまでの主流から隔絶されたものであり、技巧上の変革さえも「建築の天才児が煉瓦をいじくっているうちに、新しく一つの建築様式をあみだしたようなもの」であると言われてきた。実はこの突然変異性と無意識性のうちに詩人ホプキンズの本質が存するのであって、祖を持たない孤高性とその技巧と相まって、まれに見る近代性を生み出しているのである。

「・・・絶望よ 僕はお前を楽しんだりはしない／僕の内なる人間のこのぎりぎりの織り糸を——たとえどんなにゆるんでいようとも——／僕はほどこうなどとはしない 僕にはできる／何かができる 望むこと せめて夜明けをと願い死ぬことを選ばないことだけはできるのだ」（「腐った肉の慰め」）と彼は自分の心の深奥の苦しみを切々と訴えるが、そこに見られるのはハムレット的な「生きるか 死ぬか」ではなく、生を前提とした詩人の苦悩である。このような心の葛藤と結びつく技巧こそ近代詩の進むべき方向を示唆するものであったと言えよう。

時の流れと共にホプキンズの詩に対する評価もさまざまな変遷を経てきた。その中でも特筆すべきことは、欧米において今日まで2回いわゆるホプキンズブームというものが存

在したということである。最初のブームは第一次世界大戦後、折からのファッシズムの台頭にさからうかのように発生したもので、当時彼の詩は多くの左翼詩人によってもてはやされ模倣された。さらに第二次世界大戦を経て2回目のブームが訪れる。特に60年代以降ホプキンスに対する評価はとみに高まり、1985年に第5版が発行された「オックスフォード英文学辞典」でホプキンスははじめてメイジャー・ポエトという名誉ある地位を獲得するに至ったのである。

この2回にわたるブームには大きな共通点がある。彼は殊の外事物の持つ「個」を尊重する詩人であった。彼は自ら「インスケイプ」ということばを編み出しているが、「インスケイプ」とはわかりやすく言うならば、個々の事物の持つ「内なる姿」、個がそれ自身として持つそのものの価値という意味で、彼の詩はすべてのものにおける「インスケイプ」の追求であると言っても過言ではない。詩人として彼は「この世のものはみなそれぞれ 同一一つのことを行う／それぞれ内に住む姿をあらわし／自己を申し立て——己が道を歩み〈自我〉を語り 〈自我〉を綴り 〈私のなすことが私であり 私はそのために生まれてきたのだ〉と叫ぶのだ」（「かわせみが火と燃えて」）と終始個を志向してやまない。

第一次大戦後のファッシズムに根ざした全体主義と、第二次世界大戦後の急激な価値観の変動と画一性に対する反動として、ホプキンスの個性志向がその時代の人たちの共感を呼んだことは自然の成り行きであったと言えるだろう。

詩が時代とかかわり合いを持つのは、その詩の社会性によるのではなく、その詩の「真摯な普遍性」にあると思われる。真の詩人は時代を超えたところにありながら、時代を包みこむ役割を果たしていると言ってもいいだろう。そういう意味でホプキンスはいわば近代を先取りしたヴィクトリア詩人であった。

「さからい 自ずからなる価値を持ち はみ出し 斬新さを帯びようとした」（「美しき斑」）ホプキンスの生きざまの中に、一世紀という年月を経てやっと真の理解をかちとることのできた孤高の詩人の清冽な姿を見ることができるのである。すべてのものが画一化され管理化されているかのような現代において、ホプキンスの詩の持つ意義はまことに大きいと言わねばならない。